

基本制御文について(コード切換え文、入力データ区切り文、JEND文)

景川, 耕宇
九州大学大型計算機センター研究開発部

<https://doi.org/10.15017/1467997>

出版情報 : 九州大学大型計算機センター広報. 5 (1), pp.3-4, 1972-02-22. 九州大学大型計算機センター
バージョン :
権利関係 :



基本制御文について

(コード切換え文、入力データ区切り文、JEND文)

景川 耕[※] 宇

コード切換え文

カード穿孔機には、Hコード系とELコード系の2種類があり、どちらの穿孔機を使ったものでもシステム入力できるための制御文が用意されている。

¥NOCONV

この基本制御文以後に続く入力カードがELコード系で穿孔されたものであり、コード変換する必要のないことを示す。

¥CONV

この基本制御文以後に続く入力カードがHコード系で穿孔されたものであり、次の場合にのみコード変換を行なうべきことを示す。

穿孔位置	¥CONV を入れない場合		¥CONV を入れた場合	
	印字	内部コード(8進)	印字	内部コード(8進)
8-3	#	173	=	176
8-4	@	174	▼	175
0-8-4	%	154	(115
12-8-4	<	114)	135
12	&	120	+	116

・コード切換え文がない場合

ELコード系で穿孔されたものとみなす。

・混合入力の場合

ELコード系とHコード系で穿孔されたものを混合して使うときに各コード切換え文を適宜挿入するのは非常にめんどろな事なので、そのような場合には、Hコード系で穿孔されたカードの最初のもの前、もしくは、入力カードの先頭で¥CONV指定をしておくだけでよい。ただし、ALGOL原プログラムの場合には必ずしもそうではないので後述のALGOLの場合の注意点を参照されたい。

なお、Hコードで穿孔された入力カードが制御文やALGOL原プログラムまたはコード変換すべきデータカードの時は、¥CONV指定が必要であるが、FORTRAN原プログラムの場合には挿入していなくても、印刷結果が見にくいだけで計算処理は正しく行なわれる。

・ALGOLの場合の注意点

混合入力の場合は、あらかじめ¥CONVの指定をしておけばよいことを述べたが、ALGOL原プログラム中において & (論理積) を使用する時には注意する必要がある。つまり、¥CONV挿入後の混合入力部分に & があると + にコード変換されてしまうので、その前に¥NOCONVの指定が必要となるのである。

またここで、¥CONV, ¥NOCONV と ¥ALGOL のパラメータHTYPE, ELTYPEについての説明を加えておく。

¥CONV, ¥NOCONVは カードを穿孔した時の穿孔機の種類を示すための基本御制文である。

HTYPE, ELTYPEは ALGOL記述上、区切り記号に2種類あり、どちらの記述形式かをALGOLコンパイラに指示するためのパラメータである。何も指定がないとELTYPEとみなされる。区切り記号記述形式の違いはALGOL解説編を参照のこと。

計数施設のBridge-H.Qを通したALGOL原プログラムの場合、カード穿孔コードはHコード系で、区切り記号はHTYPEが使用されているので、¥CONV および¥ALGOL にHTYPE と両方の指定が必要である。

入力データ区切り文

¥*

入力データを定義するFD文

¥FD ファイル定義名、DATA

との組合せで、入力データの終りを示す。

この場合の入力データ中には

第1-2欄が ¥*

第1-3欄が ¥NO

第1-5欄が ¥JEND

であるものを含むことはできない。従って、上記3つ以外の制御文はすべてデータとみなす。なお、入力データ中のコード切換え文は、データではなく、コード切換え機能を持つ。

JEND文

¥JEND

ジョブの終りを示す。

これまで3回にわたって基本制御文の解説を行ってきたが、次号では、それらをまとめる意味で例をあげて説明することにしよう。